

リレーコラム

女性パワーで酪農を活性化

－ 酪農女性サミットで考えたこと －

大学の講義やたまにご依頼いただく原稿や講演でも、まずは「つかみ」に興味を持ってもらえるよう心がけている。しかし失敗も（多々）ある。昨年12月に帯広で開催された「酪農女性サミットファイナル」では、ありがたいことに講演の機会を与えられた。その「つかみ」も酪農女性を意識し工夫したつもりではあった。

このときは「つかみ」を二つ用意した。ひとつは全国から集まった方々にたいして私が勤めている帯広畜産大学を紹介するものであった。特にわが畜大が急速に「帯広女子畜産大学」化していることを指摘した。私が勤めはじめた約20年前は、女子学生割合は3割くらいであったと記憶している。しかし現在は学部的女子学生率が62.2%、令和元年度新入生に限っては67.6%となり、両方の値がコンスタントに上昇しているのである。つまり学則を変更せずとも早晩、帯広畜産大学が女子大学化するのではないか、ということを指摘した。

もう一つの「つかみ」は、ややおおげさに言うならば日本農業のさらなる発展のための「農家の女性継承」についてであった。学生のころから農家調査を続けてきたが、その中でピンと感じたにもかかわらず論文にできていないのがこれである。

発端は20年以上前の十勝での農家調査であった。小豆の単収が地域平均を軽く超え経営状態も良い、その理由を聞き出そうとしていたが調査技術が未熟なこともあってなかなか納得できる返事が得られない。しばらく粘った末ようやく「俺は婿だから、オヤジに認めてもらうにはこれしかないんだ」と話してくれた。

婿を迎えている農家は優秀なことが多い。周辺の農家と比べても作物の単収が頭ひとつかふたつ抜け出ていたり、地域のリーダーとはいかなくても模範だったりするということがある。これには理由があり、相当な非難を覚悟で書くと、父親が息子にたいして「車を買ってやるから家を継げ」などという、息子のほうも「帰ってきてやったんだから」となりがちで、なかなか担い手意識が生まれにくいのではないか。

これに対して婿の場合は真剣である。「アウエイ」（敵地）の中で仕事をしており、しかしそこで認めてもらうしかない。無論、経営を傾かせようものなら追い出されかねない。そうすると婿は農作業・マネジメントに精魂傾け、作物は単収が上がり経営は発展する。この「農家の女性継承」仮説は賛成してくれる農家が少なくない。「うちの集落にもいる」という話をよく聞く。

これは今に始まったことではなく、古い例としては後藤善治氏が有名であろう。氏の日誌「善治日誌」は、明治後期の庄内の農家に次男として生まれた善治氏が、若いころ「若勢」として周辺の農家に住み込みで働き、それが認められ新興勢力の農家に婿として迎えられ、その農家を発展させていった記録である。

なぜ善治氏が婿として迎えられたのかは興味深い。善治氏を後継者として認めた舅の与蔵氏も婿であった。当時の庄内は「姉家督」が珍しくなかったらしい。人力が何より重要な生産手段であった当時、長男の上に長女がいる場合、男手を外部から早く導入するには、長女が農家を継承するのが合理的であったのであろう。しかしどうせ外部からよぶのであれば経営者としての才覚もあった方がよい。与蔵氏の「眼鏡」にかなったのが善治氏であった。こうしてこの農家は2代続けて婿を迎え農地を集積し発展していくのである。

しかし問題は与蔵氏の娘で善治氏の妻である吉江さんである。詳細は不明であるが、善治氏自身の日誌には、吉江さんが結婚後にほかの男と村を逃げだし、方々探



帯広畜産大学 教授 仙北谷 康

した結果、与蔵氏が小樽に連れ戻しに行ったことが書かれてある。昨日まで「若勢」として納屋で寝泊まりしていた男を連れてこられて「こいつと結婚しろ」といわれても若い娘さんとしては、簡単に「はい」とは言えない気持ちや「事情」もあったであろう。家父長制がもたらす理不尽さと言えなくもない。

今はこのようなことは考えられない。娘さんの結婚相手は娘さん自身が選ぶのが当然である。しかしこの馬のホネともわからない男を連れてこられても困る。そうすると、どんな知識技能を有する相手を選んだらよいかの問題になるが、そのようなときは娘さんを帯広畜産大学に入れてもらって、農業経営の舵取りに必要なことを学んでもらい「経営のパートナーを選ぶ目」を鍛えてもらったらい。そういうことを考えると帯広畜産大学が「帯広女子畜産大学」になるのも、わが国農業のさらなる発展のためには必要かもしれない。

これが「つかみ」の二つ目であった。話はやや長かったが参加者をうまく「つかんだ」のではないかと感じた。しかし講演のすぐ次のプログラムであるワークショップで私は痛い思いをした。

ワークショップでは参加者全員が6人程度のグループに分かれ、まずは自己紹介から始まった。メンバーのうちのお一人は幼い子を持つ女性であった。自己紹介によると実家の酪農を継いで婿を迎えたのだが、舅である父と意見が対立、修復不能となり、夫が家を出たらしい。私は気づかれないように静かに息を吐きながら心の中で「イタタタタタタ・・・」と唸った。

離婚件数を婚姻件数で割った「離婚率」が約35%（北海道は44%）と、離婚する夫婦が珍しくない昨今、「アウェイで認めてもらわない」というような発想はもはや過去の考えなのかもしれない。いまさっき壇上で得意げに話しをしていた自分を恥じた。ワークショップの内容はあまり覚えていない。

酪農女性サミットが終わってまもなく研究室の卒業生の集まりがあった。そこで酪農家に嫁いでいてサミットにも参加していた卒業生にこのことを話したところ、「先生、論文の構想を温めすぎましたね。」といわれてしまった。

非農家出身者が農業を職業とするには結婚という選択肢に頼ることが多く、逆に離婚が失業とイコールになる。このような人生のイベントと職業が直接的には関わらないようにするためには、農業経営の法人化、雇成型経営への移行がもっとも近道かもしれない。しかし農業生産のすべてが雇成型の法人に担われるとは考えにくい。諸外国の例を見てもそれは明らかであろう。

サミット終了後、もちろん講演の「本論」に対する問い合わせはあったが、「つかみ」の内容をどこかで聞きつけた畜大の女子学生からも、「実家が酪農で自分は一人娘で家を継ごうと思っているが、夫はどうしたら良いか。」という、大学教員になって初めて受けた質問もあった。

この質問に対する回答も含めて、ワークショップの女性にどう話しかければ良かったのか、まだ結論は出ていない。ただ有り体に言えば、女性も男性もお互い配慮すべき固有の問題は十分理解し、誰でもが気持ちよく働ける職場が理想であろう。妻が経営主で夫がサポートという役割分担も当然あり得る。多様な働き方や役割分担を可能とする職場であることが、経営・産業の発展にとっては重要であることは間違いないであろう。